

- 2033 Patrick Hughes, George Brecht『パラドクスの匣』柳瀬尚紀訳（朝日出版社、1979年、エビステーマー叢書）

原題: Vicious Circles and Infinity.

つぎはルイス・キャロル『シルヴィーとブルーノ完結篇』（一八九三）の一節で、この地図パラドクスに関して同様の主張をしている。

「それがもうひとつ、ほかならぬあなたがたのお国から学ばせていただいたものでして」ドクトル・ドイチェはいった。「地図作成ですな。しかしわれわれは、あなたがたよりはるかにそれを推しすすめましたぞ。ほんとうに役立つ最大の地図はどんなものだとお考えです？」

「一マイルを六インチくらいでしょう」

「たった六インチですとな！」ドクトル・ドイチェは大きな声をあげた。「われわれはじきに一マイルを六ヤードにしたのですぞ。それから一マイルを百ヤードにしてみた。つぎにはこれぞ最上という考えが浮かんだ！ 現実に国を一枚の地図に仕立てたのです、一マイルは一マイルという尺度で！」

「おおいに使ってるわけですか？」ぼくが尋ねた。

「ひろげたことがないのですよ、いまのところ」ドクトル・ドイチェがいった。「農民が反対したのです。国中をおおってしまうから陽射しがさえぎられるなんていうじゃありませんか！ それでいまは国そのものを使っていますわい、国自体の地図として。これがけっこう同じくらい役に立ちましてな。」

p. 154-155

- 2034 Raymond Jean『読書する女』鷺見和佳子訳（新潮社、1989年、新潮文庫）

原題: La Lectrice.

« アリスは深い井戸に落ちてしまったことに気がつきました。井戸の深さのせいか、墜落がゆっくりだったせいか、アリスにはまわりを見渡し、これからどうなるのか考える時間がありました。まず、どんなところに着地するのか下を見きわめようと思いました。でも暗すぎたのです。そこで井戸の内壁を調べてみて、そこが食器棚と飾り棚で覆われているのがわかったのです、どこもかしこもランプやら絵がピンでとめてありました。アリスは落ちながら棚の上の瓶を一つかすめとりました。その瓶には〈マーマレード〉と書いてありました。けれど中が空っぽなのに気づいて、アリスはがっかりしてしまいました…… »

p. 111-112

- 2035 Gary Jennings『エピソード魔法の歴史 黒魔術と白魔術』市場泰男訳（社会思想社、1979年、現代教養文庫）

原題: Black Magic, White Magic.

ギリシアのグリフォン gryphon（griffonとも綴り、またグリフィン griffinともいう）は、ライオンの胸と後足、ワシの頭と前足とつばさをもつどう猛な生物だった。しかし後にはおとなしいものとなり、ヨーロッパの貴族の紋章を飾ったり、ふしぎの国でアリスとはしゃぎ回ったり、小犬の品種に名を貸したりしている〔グリフォンは粗毛でテリアに似た犬の一種〕。

p. 193-194